



いわれています。製塩土器とは、海水を煮詰めて塩を作るときに使うバケツ型の土器です。一方、土製支脚とは、製塩土器を支えるために使われた土製品です。

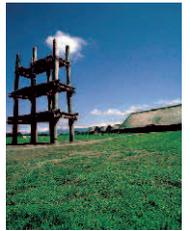
伝尻八館跡 9

最近、15世紀後半の成立であることが分かってきた城館です。城主は、安藤氏一族で室町時代にこの地の領主であった潮湯安藤氏ともいわれるようになりました。のちに安藤氏惣領となる師季(のちに政季と改名)の居館として、彼の後見人である南部氏によってこのころ大々的に改築されたといわれています。なお、名称については「後湯城」もしくは「潮湯城」の方がふさわしいとの見解もあります。

〔縄文遺跡〕

三内丸山遺跡 10

約5500~4000年前、縄文時代の前期中葉から中期にかけての集落跡で、およそ1500年もの長い期間に亘って人びとがここに定住していました。これまで縄文人は「採集狩猟」の民で定住しないと考えられてきた常識を、この遺跡が一刷新しました。竪穴住居跡のほか、壘列やストーンサークル、祭礼の広場であったと考えられる盛土、高床の倉庫であった掘立柱建物跡、道路跡などが確認され、若衆宿であったと考えられる大型住居(ロングハウス)や、巨大建造物の技術を示す六本柱遺構などが発掘されました。祭礼に使われたと思われる板状の土偶、今日の民具に綿々とその技術が受け継がれている蔓材の編み物や編布、世界で最も古い漆塗りの器、糸糸川(いといかわ)のヒスイなど広い範囲での交易を示す遺物などが発見されています。



細越遺跡 11

この遺跡は、縄文時代と平安時代を主体とする遺跡で、中世の遺物も発見されています。このうち、平安時代の遺構からは、県内でもこの遺跡にしかみられない、角材と横板で土留めされた水路・排水路とみられる溝跡が発見されました。これは、水田跡に関連するものとみられており、注目されています。

朝日山(1)(2)(3)遺跡 12

朝日山(1)遺跡では、縄文時代晩期前半の墓地跡が発見されるとともに、平安時代(9世紀~11世紀前半)の大集落跡が発見されました。また、朝日山(2)遺跡でも平安時代(9世紀~10世紀中葉)の墓地を伴う集落遺跡、朝日山(3)遺跡ではおなじく平安時代(9世紀後半~10世紀中葉)の集落跡が発見されています。とくに、朝日山(2)遺跡では、奈良時代の代表的な鏡である伯牙彈琴鏡が出土したことで知られています。

新町野遺跡 13

この遺跡は、縄文時代と平安時代の複合遺跡です。平安時代では、9世紀後半~10世紀後半に盛期となる2か所の集落跡が発見されました。竪穴住居跡・精錬炉が検出され、とくに廃した竪穴住居跡再利用して構築された円形周溝が注目されます。これは、終末期古墳の系譜を引き継ぐ墳墓と考えられています。

野木遺跡 14

この遺跡は、縄文・弥生・平安時代の複合遺跡です。このうち、平安時代の野木(1)遺跡は、県内最大級の遺跡として知られています。竪穴住居跡576棟など多量の遺構が検出されています。そのほかにも、礎石のある建物跡・便所遺構・階段状道路遺構など、これまで発見例の少ない遺構と、それにとりまう遺物が発見されています。

小牧野遺跡 15

環状列石を中心とする、縄文時代後期前半の遺跡で、三内丸山遺跡の直後の時期に当たります。環状列石は直径55mの四重の環になっており、約2900個、推定30トンの石を用いて造られています。遺跡のなかに、造成された大規模な道が見つかっています。小牧野遺跡は祭礼葬送に特化した特殊な集落でした。三内丸山の時代が終わって、この周辺には、それぞれに機能を持った特殊な集落がいくつも出来てきます。三内丸山という巨大な都市にすべてを集約することをやめて、それぞれに役割を分担し合った小さな集落が、相互にネットワークするという姿を、縄文人は選んだのです。



【中世城館】
青森市内には中世の城館が26か所ほど知られています。このうち、とくに後湯・内真部(うちまべ)地区には、安藤氏との関わりが想定される城館群があり、注目されます。

堤ヶ浦屋形 1

三戸南部氏は、一族の田子弾正左衛門尉光康を、津軽郡代として堤に置きました。明応7年(1498)に、光康が「堤ヶ浦」に築いた館が、古館と大館で、堤川に面し、相当な大きさだったようです。おそらくこの館より下流にあった「包宿」を支配していたのが、光康だったと思われます。この光康の一族がやがて横内に城を構え、荒川の流れを変えて駒込川に合流させ、巨大な沼であった安瀦の水を断って、平野を拓いたという伝承があります。この伝承の真偽はともかく、光康の一族が、現在の青森の基盤を作ったことは間違いのないようです。



横内城跡 2

真言宗の寺・常福院が、中世の横内城です。寺の境内には、堀の跡が見られます。大浦右京亮(津軽為信)は、天正13年(1585)または18年、堤孫六の息子である横内城の最後の主(南部氏の系図)に書かれた名前が堤弾正左衛門を攻め滅ぼしました。弘前藩は、朝日氏一族である朝日御前を弔うため、この寺の名前を朝日御前の戒名「常福院殿安養妙貞大禅定尼」に因んだものに変え、弘前の真言五山の隠居寺としました。

高田城跡 3

16世紀の『津軽郡中名字』にも名前が見える高田は、浪岡から山越えした大豆坂街道が、荒川沿いに堤湊へ向かう道と、細越・三内・新城を経て油川湊へ向かう道が分岐する場所にあります。近世のこの大豆坂街道が中世の奥の大道だったと考えられています。中世の高田には石川高信(のちに盛岡領主となる田子信直の父)に属する土岐大和助則基が置かれていました。横内の堤氏と並んで、南部氏が外ヶ浜を抑える拠点でした。天正13年(1585)または18年、大浦右京亮(津軽為信)に攻め落とされ、則基とその子善兵衛則里が戦死、善太郎則忠が三戸に逃れています。



新城と天狗館 4

新城は、外ヶ浜の湊(油川大浜)と津軽平野を結ぶ交通の要衝にありました。浪岡から大釈迦(だいしゃか)を経て新城・

油川へ向かう近世の羽州街道や、同じ浪岡から高田で堤へ向かう道と別れ三内を経て新城・油川へ向かう大豆坂街道は、中世の奥大道を受け継いだものだと考えられていますが、そのいずれも新城で合流して油川湊へ向かいます。その街道が、天狗館の直下を走っており、街道を挟んで南側に新城があります。

これら中世の2つの城は、津軽を支配しようとする北畠氏や大浦氏が交通を抑えるために使っていたと思われ、街道には中世の宿場町があったと考えられます。天狗館跡は現在の見道寺、新城跡は線路をはさんで反対側、現在の照法寺にあたります。



油川城跡 5

油川城は浪岡御所北畠氏の支配下にあっただろうとも考えられています。北畠氏が油川湊によって交易を行っていたからです。ところが、この油川城は、油川大浜の町からいささか離れた場所にあります。最近の研究では、この城は北方の民族との交易で儀礼に用いられたのではないかと考えられるようになってきました。天正13年(1585)または18年、大浦右京亮(津軽為信)によって攻め滅ぼされました。



内真部城館群 6

内真部(うちまべ)地区には、内真部山城跡・内真部城跡・湯ノ沢館跡・前田蝦夷館跡など多数の城館が存在しています。このうち内真部館は、津軽の大豪族安藤氏の一族で、鎌倉時代末期(1322~28)に起こった「安藤氏の乱」の当事者のひとり、安藤五郎三郎季久(後に又太郎宗季と改名)の居館であったといわれています。

前田蝦夷館 7

内真部城館群のひとつで、この城館群のなかではひととき堅固なものといわれています。「安藤氏の乱」もしくは、南北朝の動乱のなかで構築され、利用されたと考えられています。

内真部遺跡 8

この遺跡は、平安時代(9世紀後半~10世紀前半)の製塩遺跡として知られています。出土した遺物はほとんどが製塩土器と土製支脚の破片で、いずれも製塩に関わるものと